

季題（再）

山口青邨

俳句で、單に月と言へば、秋の月のことである、秋は大気も澄み、月が明るく、四季のうちで一番代表的な月の姿を見ることが出来るので、さうしたのであらう。そのほかの季節の月は、春の月、夏の月、冬

の月と季節の言葉をかむせることになってゐる。春の月でも朧月など、特別な名前をもつてゐるものもある。またお盆の月は盆の月、梅雨の晴間に出る月を梅雨の月と言って、その時々季節的情趣が添へられることもある。冬の月でも寒月と言へば各の中でも最も寒い頃の寒三十日の間の月のことである。

また秋の月でも名月、十五夜の月、十六夜の月、立待月、居待月、寝待月、更待月、などと、その夜、その夜の月の出の時刻によって趣のふかい美しい名前がつけられてゐる。

それから單に祭と言へば夏祭のことである、もともと京都の賀茂祭（葵祭）から出てゐることである。秋に行はれる祭は秋祭と言ひ、春の祭は春祭と言つてゐる。

地方々々によつても違ふであらうが、夏祭がさかんなところもあるし、秋祭をさかんにするところもある。また、春秋二回、お祭をするところもある。

秩父市の秩父神社では、冬祭をさかんにする習慣があり、大仕掛の花火など揚げて、近在から何萬といふ人出があるといふことである、秩父のやうな寒いところで、しかも寒い時に行ふ祭も珍らしい。

かういふ珍らしい行事、冬に花火を揚げる祭などは、ほんたうをいうとなかなか難しい、花火は秋の季題、祭は夏、それが冬の祭といふことになる。普通の概念からすると、いろいろ季感の反撥があつて、渾然とした作品が出来にくい。——と言って、この各祭の特異さを捨てるといふわけには行かない。

山口青邨著『俳句入門』より一部抜粋